

---

# 『メガネと天狗の山』

五目御飯

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『メガネと天狗の山』

### 【Nコード】

N4939Z

### 【作者名】

五目御飯

### 【あらすじ】

地に足が届かない女子中学生と、空気的存在感を誇る天狗が、同棲しているらしい。彼らの日常を観察・記録をするため、筆者は立ち上がった。得た情報は適宜読者の皆様にお知らせするとともに、彼らの生態系を詳細に研究していく所存である。どうにもつまらない結末になりそうであるが、少しでも興味を持った同人は付き合ってほしい。今 筆者の冒険が始まる。

## イ（前書き）

筆者は決意したのだ。タイムマシンに乗り、天狗が現れた時代へ旅立った。空に閃光が！「ドーン」という音に驚きを隠しきれないまま、筆者は口を開いたまま、呆然と空を眺めていた。天狗である。本物だ。誰か偉人が亡くなったのか、天変地異の前触れか、幼児が病気なのか、おめでたなのか。筆者は天狗に駆け寄った。倒れる天狗。危険を顧みず、それに近づく筆者。天狗からは煙があがっている。「大丈夫か」「大丈夫だ、問題ない」。ブイサインを返す天狗。苛立ったので、取り敢えず蹴っておく。それから、その天狗の姿を見かけたのは、ある山中を歩いていたときであつた。これは…跟けるしかない！

イ

ナキは非常に困っていた。  
人の子が懷いてしまった。  
人の子はナキに抱きつき、こう言うのだ。

「うちな、ナキのお嫁さんなるわ」

ナキは非常に困った。  
なぜなら、彼は天狗だから。

彼は、一刻ほど前である。  
ナキは山中を散歩していた。  
久々の外出であった。  
冬の風が頬に当たる。冷える身体を包むように、ナキは両二の腕を持つ。

本当は、祠の奥で休んでいたかった。  
しかし、そもいかない、用事ができてしまったのだ。  
人間様に呼ばれてしまった。

山神たるもの、人がいてこそ存在できる身。  
お呼ばれされたからには、行かねばならぬ。  
“山神”と言ったものの、天狗という存在は、まあ不思議なものである。

神という人間もいれば、物の怪と呼び、避ける人間もいる。  
善か悪かといわれると、どうにも首を傾げる存在。

生き物であるかも定かではない。  
ただ、腹は減るらしい。

さて、話は戻る。

自分の名を呼ぶ人間の様子を見に、祠を出た。  
どうやら、自分の名を呼んだのは童子らしい。

童子は社の前で泣いていた。

華奢な身体は、ちゃんと仕事ができるのかと尋ねたいほどである。  
華奢というより、痩せ細った、と表現した方が正しいかもしれない。  
い。

「おれを呼んだのはお前か」

上から目線の、低い声。見下した目は童子を睨み付けているようである。

別に、そういうつもりはないのだが。

「ああ、来てくださった。うれしゅうございます、ナキさま」

「用件を述べよ。おれは頗る眠い」

ナキの登場に感動していた童子は、心底驚いていた。  
天狗も寝るのだ。

「迷子になってしまいました」

なんとということか。

迷子になったからと、呼び出されてしまった。

さっさと童子を人里に帰し、自分も帰宅して飯食って寝よう。ナキは今後の予定を組んだ。

「お前の里はいずこに」

問うと、童子は谷を指して「あの辺りです」と言った。  
苦手な里であった。

あそこの住人は、どうも気性が荒い。  
空腹に耐えかね、里に下りると、彼らは石を投げてきた。  
飢饉であったこともあるだろうが、そこまで露骨に追い出そうとしなくても。

ナキは以降、あの里に下りることを避けている。  
まさか、このような形で再度訪れることがあるうとは。

「よろしい。目を瞑りなさい」

童子が目を瞑ったことを確認。

ナキは童子を抱え、里まで飛んだ。

久々に飛ぶと、気持ちのいいものである。

引き籠り生活が長すぎたようだ。

食料は山の動物が持ってきてくれるため、生きるに困らない。  
墮落した生活を送っていた。

ナキは童子を里の入り口で降ろした。

目を開けるよう言うと、童子は素早く、目を全開させた。

大きな目がこちらを見つめている。

ナキはたじろぎ、目を逸らす。

視線は止まない。

「なんだ」

我慢できず、こちらから声を掛けた。  
すると、童子は言ったのだ。

「うちな、ナキのお嫁さんなるわ！」

どういうことだろう。

厄日なのか。今まで堕ちた生活を送っていたことに、天災がやってきたのか。

天狗そのものが天災であるはずなのに、どういうことだろう。

この里の人間は、どうもこの天狗を困らせてくれるらしい。

敬語もどこかへ行ってしまった。

「ああ、その。反応に困るから、そういうことは」

「天狗様がうちに来られたら、母上もお喜びになる！」

童子と思っていた人の子は、どうやら女であったことが今更発覚した。

さておき、事情が呑み込めない。

「どういうことだ」

「天狗様が家にいると、その家は裕福になるのです。昔からの言い伝えです」

座敷童かなにかと勘違いをしているのではないだろうか。

だが、座敷童は家の守り神であり、裕福にする神というわけではない。

この里だけに伝わる話だろうか。

そんなことはどうでもいいのである。

ナキはそろそろ、空腹と眠気のダブルアタックに倒れそうなのだ。  
帰ってもよいだろうか。

「うちの家は貧乏でな、畑はよう荒らされる、男手はおらん、女兄弟ばっか。母上も床に伏せ……」

彼女は顔を伏せ、鼻をすすりはじめた。  
泣いている。

女の泣き声は苦手である。

ナキは彼女の頭の上に、手を乗せた。  
すると、瞬時に彼女の手がナキの手首を掴んだ。  
油断していたこともあり、引つ込める暇もなかった。

「というわけで、どうかナキ様、天狗様。うちの家に来てくれん？」

嘘泣きであつたらしい。

大体の人間は、泣けば顔が赤くなるものだが、この娘の顔は先程と変わっていない。

元気で、明るい笑顔が、こちらを見つめている。

とはいえ、言っていたことは事実らしく、やせ細った手足は、見ていて折れそうで怖い。

なんとかしてやりたいと、ナキの良心は訴えている。  
だが、こちら也非常事態なのだ。

「すまない」

ナキは、彼女の顔を見ずに、小声で言った。  
謝罪の言葉は、彼女に届いていたのだろうか。

確認する余裕もない。

ナキは、人の子を置いて、山へ帰った。  
また、飯食つて寝たら、来るから。

なんて、自分勝手なことを発言することはなかった。「また来る」



とも言えなかった。

言えば良かった、と後悔したのは、祠で遅めの朝食を摂っていた時であった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4939z/>

---

『メガネと天狗の山』

2011年12月16日20時54分発行